

蘇れ医療

第6部

試練を超えて

病院内で異なる診療科や職種が連携する「チーム医療」を、複数の開業医が地域で実践する試みが、東京で根を広げている。

1994年に旗揚げした「世田谷区若手医師の会」。当初7人だった会員は106人に増え、ほぼすべての診療科に及ぶ。約20人の病院勤務医と連携して急性期から在宅まで対応する機能は「地域で横に広がった病院」(ある会員)だ。

患者紹介し合う

「透析は任せて」「内視鏡検査には自信あり」など、会員の専門科や得意分野、臨床経験などをデータベース化し、患者を紹介し合う。医師不足など地域医療の

神津内科クリニックに通う国田晴子(84)は昨年夏、院長の神津仁(59)に大動脈弁狹さく症と診断され、手術を勧められた。「腕が

良く信頼できる」と大病院の心臓外科医を紹介され手術を受けた。今月初めには血栓が脳の血管に詰まる心原性脳梗塞(こうそく)を発症したが、神津の機敏な手配で血栓を溶かす治療を受け、すっかり回復した。「優れた医師の治療を地域で受けることができ、安心できる」と国田。「出身校も経歴も専門も異なる医師が連携することで地域医療の質を高め、患者を支えている」と神津は話す。

地域で縦横に連携



危機を乗り越えようと、住民が医療機関と連携する取り組みもある。

「きょうは栄養の過剰と欠乏をテーマにお話ししま

住民も支え手、知恵絞る

「若い医師のコミュニケーションスキルを鍛えようと10人の市民を前に、研修医が話し始めた。

同病院と特定非営利活動法人(NPO法人)「地域医療を育てる会」が2年前、井葉山(60)は語る。

「育てる会」理事長の藤本晴枝(44)は「住民が病

つくった。県立病院が廃院となり、「地域医療を守れ」との運動が実って開設されただけに、町民の関心は高い。院長の佐藤元美(54)は「医療が限りある公共の資源であることに住民が気づき、地域医療の支え手となっている」。

滋賀医大(大津市)は「住民も医療機関も行政もみな大変な状況。限られた医療資源を使ってどう打開するかを共に考え、知恵を絞る先に道は見える」と自治医大教授の梶井英治(57、地域医療学)。立場を超えた縦横の連携が、貧血状態の地域医療に活力を蘇らせる。

担当する准教授の埜田(たのだ)和史(54)は「医学生の約8割は県外出身。山間地の診療所を訪ねたり、名物料理を味わったりしながら、地域医療の役割や滋賀県の良さを理解して、県内に残ってもらえ

話会だ。研修医が健康や医療に関する話を約15分した後、市民が「声は聞き取りやすかったか」「専門用語を分かりやすく言い換えていたか」など20項目を5段階評価する。

岩手県の藤沢町民病院も昨年2月、同様の仕組みを

院に依存しては医師らを疲弊させるだけ。医療関係者に「プチ里親」になって、医師や看護師の卵に地域医療の魅力を伝える活動を昨年から始めた。現在、里親は40人。「地域医療の維持に一役買った」と引き受けてくれた。その一人、甲賀市の眼科医、佐藤友哉(52)は「最先端の医療現場に比べ、地域医療は地味でつまらないと思われがち。住民と深くかわる楽しさや、やりがいを感じたい」と話す。

担当する准教授の埜田(たのだ)和史(54)は「医学生の約8割は県外出身。山間地の診療所を訪ねたり、名物料理を味わったりしながら、地域医療の役割や滋賀県の良さを理解して、県内に残ってもらえ

研修医(中央)の説明を市民が評価(千葉県東金市の県立東金病院)

「意見、情報を郵便かメール(tirou@tokyo.nikkei.co.jp)やお寄せください。日経ネットADLDS(<http://etplus.nikkei.co.jp>)でも関連情報を掲載しています。